

スカウティングと環境

SCOUTING AND THE ENVIRONMENT

世界スカウト事務局資料（翻訳）

1. 序文

“ 自然研究は、神があなたを楽しませるために創造された世界がいかに美しく素晴らしいものに溢れているかをあなたに示してくれる...生まれたときより少しでもよい世界を残すように努力しよう ”

ベーデン・パウエル 世界のスカウトたちへの「最後のメッセージ」

“ しっかり目を見開き、耳を澄ますならば、誰にとっても、森林はそのまま研究室となり、クラブとなり、礼拝堂ともなる ”

ベーデン・パウエル著「ローバーリング・ツウ・サクセス」

1922年 ロンドンのハーバート・ジェンキンス社発行

今世紀最後の10年に入ると、人類にとって直面する環境問題は時代の主役となった。毎年、毎月、地球の健康状態に関する悲劇的評価が、国連、調査研究所、大学、オピニオンリーダー、多くの国の政治家たちから発表されている。それらの見解は、ラジオ、テレビ、新聞等により、世界中に伝えられ、生態系保護システムの危機、気象安定の必要性、地球温暖化の危険性、現在世界の多くの地域に起こっている苛烈な食料不足の原因になった人口と資源の不均衡、市街地の空気汚染などに関して多くが語られている。

環境を正常に保つこと、現世代のニーズと「欲望」を満たしていくために、将来の世代の生存を危機にさらさないこと、この重要性への意識がここ数年、急激に高まってきた。しかし、同様に認識が必要なことは、どこの社会も国も今日の社会を「持続」させていくために、画期的な転換が必要なのに、未だにその戦略に乗り出していないことである。

この理由には、次の3点があげられる。

1. これらの戦略は、**苦難と多額の経費**を要する。したがって、国民の全面的な支援を受け得る政府によってのみ、実施が可能である。
2. これはすなわち、**価値観の変換**、つまり行動の変換ということである。したがって合理的な信念だけでなく、倫理的献身をも必要とする。
3. 結局のところ、これは**教育の問題**である。教育は長期間のプロセスであり、特に知識とか技能の取得に留まらず、**心構えの変換**をも目指すときには、そうである。

教育の問題となると、スカウティングはそれに関与することになる。

当資料発行の狙いは、ここにある。環境への配慮は、創始者の教えに則すことであるか？ 創始以来何十年にわたって、それはスカウティングにおいて一貫して実施されてきたのではないか？ この種の資料はこの分野のスカウト運動の豊かさを部分的にしか反映できるにすぎない。各国のスカウト連盟と指導者たちに注意を喚起したいことは、この資料の真の目的は、**広々とした広がりのパノラマ**のように示することであり、**読者各位からの反応を得て**、それを補完し、豊かな内容のものにし、そして願わくは将来一段と充実した内容の資料を発行することである。

2.1 ベーデン・パウエルと自然

スカウト運動の創始者の著作全般には、自然への深い愛と、自然現象全般への尊敬が満ち溢れている。ベーデン・パウエルの著作で最も頻繁に用いられるテーマのひとつは、少年の基本教育の一部として自然のすばらしいプロセスを**観察させ、理解させ、保護させる**ことの重要性が一貫して強調されていることである。70年以上前の著作であることを考えると、この問題に関する創始者の先見性の偉大であったことを感じずにはおられない。

このようなことから、B - Pは最も著名な作品「スカウティング・フォア・ボーイズ」に“ウッドクラフトを通じての市民性の教育手引書”との副題を付け、ウッドクラフトを“動物と自然に関する知識”と定義した。この著作の中で創始者は、カブ、ボーイ、ローパーおよび指導者に野外活動とキャンプにおいて何をすべきか、何を避けるべきかについて具体的な助言を試みているが、それは素晴らしいの一言につきる。

しかし、B - Pの自然に対する崇拜と畏敬の念を要約するには、ローパーに向けられた以下の一節を引用するに如くはないであろう。森林を題材にした中で、B - Pは次のように記している。“…そのすべての中に、生命、感動、再生、死、進化が粛々と進行しており、それはわれわれが支配されているのと全く同じ偉大な法則にしたがっている。**しっかり見つめ、耳を澄ますなら、誰にとっても、森林はそのまま研究室にも、クラブにも、礼拝堂にもなりうる。**”

2.2 ちかいとおきての原文

疑いなく、B - Pの教育的アプローチ全てが自然を基盤とし、自然志向であった。したがって、当然のことながら、おきて原文を作成するとき、B - Pはその中に「スカウトは動物の友である」というように自然に関する一文を組み入れた。実際、この原文を完全に記すと、次のようである。“スカウトは動物の友である。彼は、可能な限り、動物を危害から守り、不必要にどのような動物も、たとえ蠅一匹でも殺してはならない。それは全て神の創造物であるからである。”

明らかに、B - Pがこの原理を簡単極まりない表現にしたのは、これが今世紀初頭にちかいを立てようとしている少年たちにとって分かり易く、受け入れられるようにするためであった。時代を経るにしたがい、多くのスカウト連盟がこの考え方を代えずに、時代に応じた用語で表すようになった。たとえば、“自然への愛”、“自然を学ぶ”、“自然保護に関心をもつ”等

と。これらの表現は、創始者の考えを一層明確に示すことを意図したものであり、決して敷衍したものではなく、むしろ当初の基本理念を確認したものである。

2.3 初期の実際活動

ブラウンシー島のキャンプは、B - Pにとって実験であった。したがって、E . E . レイノルズが自らの著作“最初のスカウトキャンプ”の中で指摘したように、このキャンプで完全な形で活動や指導法が用いられたことに大いに驚かされた。B - Pは木工、観察、規律、健康と忍耐、騎士道、人命救助、愛国心を項目とした訓練計画を立てた。

自然は、背景としてだけにとどまらず、多くの活動の舞台として重要な役割を果たした。“スカウティングの実際活動の多くは、追跡、忍び寄り、観察訓練を扱っている。”パーシー・エヴェレット卿は、キャンプファイヤーでのB - Pの姿を鮮やかに思い起こして、次のように言った。“ゆらめく炎の前に立ち、鳥の鳴きまねをし、野生動物への忍び寄り方を示した。”

実験キャンプの間には、様々な競技も行われた。“その種名を判別した木の葉のベストコレクション章、また、観察テスト章もあった”と、レイノルズは記し、続けて、“実際、B - Pは、実際活動の中で、観察、追跡、忍び寄り、その他の同様なスカウティング活動に重点をおいていたように思われる”としめくくっている。

1921年に「ジャンボリー」というタイトルで出版して以来、世界スカウト事務局の月刊誌であった「ワールド・スカウティング」は、自然および環境保全に関する多くの記事を掲載していった。1951年に、また特に力を入れるようになったのは1956年からであるが、環境保全を定期的に取り上げ、特集記事扱いを何回か行った。初期におけるスカウティングの“環境保全”教育に果たした実績を要約するには、指定されたページ数内には納まりきらない。これは歴史家に譲るとして、ここでは主に50年代初めから中間までの重要な出版物数冊について記しておくことにする。たとえばアメリカ連盟の1954年の報告書である全国的環境保全運動への参加、1956年のオタワのカナダ連盟本部出版の環境保全活動のための専門コース訓練ハンドブック（カブ、ボーイ、シニア各部門向け）、1956年のインターアメリカ世界スカウト事務局発行の環境保全技術マニュアル、1957年のアメリカ連盟出版のボーイスカウトのための環境保全の魅力等があげられる。

上記のような各国の努力の頂点に達したのが、1958年のボーイスカウト国際事務局（当時はこの名称で呼ばれていた）の出版物で、ユネスコからの資金協力を得、大規模な完全収録版といえる Jax Cox 著「環境保全による奉仕」である。これは、環境保全分野における現在までに実施されたり、初めて発表された活動を徹底的に研究した労作である。この本の副題は「環境保全の世界的問題 自国の野生生物と資源を守るためにスカウトのできる、あるいはスカウトが実行している方法と、その意義に重点を置く参考書」とあるが、内容はまったくその通りのものである。

3 世界スカウティング方針：世界スカウト機構の規約と世界スカウト会議の決議

3.1 世界スカウト機構の規約

自然およびその保護への配慮は、全てのスカウト連盟の不変の方針であり、また実施されてきた。実際、1922年から1972年の間の世界規約の中に様々な形で盛り込まれてきた。しかし、規約条文上からも、また教育的視点からも、この概念が最も明確に記されているのは、1977年にモンリオールで開催の第26回世界スカウト会議で承認された現行の世界スカウト機構規約である。

“自然”に関する記述は、現行規約の第1章に3か所にわたり記されている。

- **スカウトのおきての原文** これは歴史的な関連から記述されている。
- **基本方針** 創始者の理念を遵守することが、世界スカウト機構規約第2条に次の3項目（運動の目的達成にあたり守るべき基本原則と信念）にまとめられている。

“神へのつとめ” “他人へのつとめ” “自分へのつとめ”

“他人へのつとめ”では、規約は社会に対して様々な面で個人が責務を果たしていく基本的な考え方がたくさん示されているが、その中に“同朋の尊敬と自然界の保全を認識し、尊ぶ社会の発展への参加”がある。

“自然界の保全”の概念は、“地球上の人類の生活空間とそこに存在する有機体組織は独立したシステムである生態系全体からなり、その一部が損なわれると、全システムに影響が生ずることが強調される。更に、この疑念は、開発目標の達成を迫るために、人類は自然界のバランスと調和に有害な仕方自然資源を濫用してはならないことを強調している。”

- **スカウト方法**の項は、世界規約第3章に、スカウト方法とは“それを通じての累進的な自己教育システムである”と定義している。また、4要素があげられている。それは、ちかいとおきて、体験学習、小グループの一員になること、“参加者の興味を基盤としたいろいろな活動からなる楽しい累進的なプログラムである。また、プログラムは、ゲーム、役に立つ技能、地域社会への奉仕を含み、それは自然と触れ合える野外の状況で多く行われる”としている。

上記で指摘しているように、スカウティングの創始の時点から自然と野外生活は、スカウト活動の理想的な枠組と考えられてきた。野外生活と自然との触れ合い（世界規模では、スカウト方法に欠かせないものと考えられている）は、**スカウティングの目的と直接的な係わり合い**をもつ。

この係わり合いについては、本資料の第4章で詳述する。

3.2 世界スカウト会議決議

参考に供するため、世界スカウト会議の決議を歴年順に列挙する。（添付資料 参照）

要するに、これらの決議は、世界スカウト事務局および各国スカウト連盟が実施してきたスカウト活動の中に反映されており、本資料5、6に記載の通りである。

興味深いことは、70年代初頭に頻繁に使われた“自然保全”、“自然保護”、“自然保

存”、“自然保存活動”等の用語が、現在では圧倒的に“環境”という語に取って代わられていることである。

4 環境教育と実践：概念上の範囲

4.1 教育的見地から：青少年の身体的、知的、社会的、精神的発達に役立つこと

スカウト運動の歴史全体が、環境保全への献身ではあるが、あまり認められることのない歩みであった。70年代に入ってやっと、自然保全と環境問題が世界的に重要課題として頭角を表し、この分野におけるスカウティングの役割の重要性が広く大衆の認識するところとなった。

スカウティングは、“公教育外”ないし“学校外”教育の分野で先駆者的な貢献をしてきたことから、“教育の革命”と呼ばれてきた。しかし、環境教育の面でも同様に、スカウティングは先駆者的な役割を果たしている。進歩課程を通じて児童や青少年に愛と自然への畏敬の念を教え込んできたし、それによって現在のスカウティングは世界至る所で環境運動の推進に重要な貢献を果たしてきている。

スカウティングの貢献の性格は何か？ 端的に論理的に説明するならば、**スカウト運動の目的**は、世界規約に示されている人間性発達の4分野に関連している。

青少年の**身体的発達**に野外生活が有益であるのは自明である。野外活動は、青少年にとって学校での座学や、テレビやコンピュータの前に座ったままの時間が増加しているが、これを補うのに役立っている。スカウティングは、**自然界との絶対的な関係**を持つ場を提供しており、特に人口の急激な増加が続く首都圏および都市部では、木によじ登ったり、川や湖で泳いだり、山奥でのサバイバル技能を実際に行う機会が皆無に等しいから、そうと言える。

あまり目立たないが、基本的なことに、自然の中での生活が児童や青少年の**知的発達**に役立つことがある。自然は、彼らの視野を広げ、森羅万象の根源を究める方向に向かわせる。特に、動物や植物は、観察、発見、探検という全ての児童の生まれつきの欲求を呼びさます。観察の

習慣は、青少年に自然界やその相互依存に関して多面にわたり疑問を持ち、調査研究する方向に向かわせる。最後には、自然の中での生活に必須の五感の働きによって目に見えないものへの感受性、柔軟性を養い、結果として創造性と独創性のための教育となる。

自然の中での生活、キャンプ、ハイキングは、児童や青少年の**社会性の発達**にも非常に有益である。市街地では、グループの問題はグループを離れ家に帰ってしまえば、避けられるが、一旦自然に出れば、様々な問題に取り組まなければならないし、小人数のグループ（班）は、一層強く、一層安定したものとなり得る。児童の創造の中で自然は、多分、危険いっぱいの“未知の世界”である。力を合わせ実際の（あるいは架空の）危険に立ち向かい、生きるためのニーズを満たすために共に戦っていくことにより、グループのメンバー相互に真の連帯感、強い“共感”や同志愛が育まれる。

更に、Malek Gabreは、その著作の中で“スカウト教育における野外の重要性”と“人類の必需品と相互協力を通じてそれを満たす方法を認識する機会を与えることによって、いわば自然は若者に歴史と接触させるのである。戸外で火を起こして炊事をした経験のある者だけが、水道水、電気またはガスストーブを作り出すには何百年もかかったことが理解できる。このように、自然は、若者に時間の認識、何世紀もの重み、文明の征服や社会生活の意義と重要性を認識させてくれる”ことを指摘している。

最後に自然は、若者たちの**精神的な発達**に理想的な素地を提供している。B - P自身がこのことを非常に明確な言葉で表現している。“ローバーリング・ツウ・サクセス”に次のように述べている。“無神論者は、...人間の手で書かれた書物から学び取ることになる宗教は本物ではないと主張する。しかし、彼らは印刷された本以外に...神がひとつの手段として私たちに自然という偉大な本を読むように与えてくれているということを見ようとしなさい。そして、彼らにしても目の前にある現実が真実でないということとはできない...。私は自然研究を信仰の一形式とか、宗教の代替物として提示しているのではなく、ある場合においては、自然への理解は宗教を手に入れる一手段となると主張するのである。”

B - Pは、彼の考えを以下の言葉で要約している。“自然の知識とは、神を認識する一歩である。謙虚さと畏敬の念は...海で、森の中で、深山の奥で、自然と一体化することにより会得できる。”またB - Pは“私にとって何よりも驚きは、教師の中のかなりの者がこの（つまり自然研究という）安易な確実な教育手段を見落とし、落ち着きのない少年たちに、より高邁な

ことを考えさせるための手段として、最初から聖書の教育を課そうと努めてきたか”と述べている。

結論として、自然と野外はスカウティングの教育方法の中で中核となる役割を果たしてきた。そうであるからといって、特にスカウティングにおける教育手段として自然や環境を十分に活用することにより、今日の若者たちのニーズと期待に確実に応えていくために、われわれの教育方法を時代にあわせて改善し続けていくべきではないという理由にはなりません。

4.2 地域社会参加の見地から：生活の質の向上

スカウティングを定義すれば、現在もこれまでと変わらずに地域社会に深く根付いてきているといえる。社会生活の質の改善面でのスカウティングが果たしうる役割は、B-Pの著書全般に浸透している。要約すれば、彼はその“最後のメッセージ”の中で“生まれたときより、少しでも、よい世界を後に残すように努力しよう”と述べている。

この思想は、世界規約の中でも力説されており、それは以下の2カ所にある。

- 第1章では、スカウティングの目的に言及し、“スカウト運動の目的は、個人として責任ある市民として、地方、国、国際社会の一員として、身体的、知的、社会的、精神的に全潜在能力を発揮できるよう若者の成長に貢献すること”としている。
- 第2章では、基本原理に関する項で、他人に対するつとめという見出しの中で、“社会の発展への参加...”をうたっている。

本運動の草創期から、この考え方は奉仕の精神とか、“善行”の実践の中に埋め込まれ、ちかいとおきての中に盛り込まれてきた。何十年もの間に、社会科学の進歩が主な理由で、社会調査および社会参加の技術が大きく変化し、その用語は多様化し、より専門的になってきた。このようにして今日、社会的な義務履行の様々な形を表示するのに、地域社会奉仕、地域社会開発、開発教育、開発協力という用語を使っている。しかしながら技術がいかに変革されようとも、その**精神**は本運動の初期に展開された活動のときと全く変わらないことを認識することが重要である。

アフリカの少年たちは、初歩的な健康管理に取り組み、フランスのローバー年齢のスカウトたちは、森林火災の防止と消火のために監視を続け、英国のベンチャラーたちは青年失業者セ

ンターでボランティアとして奉仕を続け、世界中では何百万というスカウトたちが森林後退を阻止するため植林を実施しているが、彼ら全ては同一の精神の下に活動している。同一の精神とは、つまりニーズを発見し、他の人々と話し合い、人々を動機づけ、責任感を共有し合い、最も適切な実行計画を立案し、優先順位を明確にした上で実行することである。

これらの活動はいずれも、二重の効果がある。ひとつは具体的な成果である。これは、一般に**プロジェクト**と呼ばれるもので、その成果は、植樹や養鶏の数、パイナップル畑の広さというように測定できるということである。しかし、もっと重要な成果は、時には目に見えない、いわゆる**プロセス**と呼ばれるものである。これらの行動を通して、スカウトたちは地域社会が苦難、忍耐、あきらめという悪循環から抜け出すのに役立ってきた。彼らは、地域社会に希望を再び見出し、いわゆる秘められた内面的な力を引き出し、強化できるようにしてきた。これらの変革は、今後も継続されるであろうし、地域社会に新しいダイナミズムを生み出し、そこに住む人々の生活を豊かにしていくことであろう。

環境活動は本質的に、若者の動機づけや、参加に有益な基盤となり得る。同時に、環境活動はスカウティングが地域社会の働きかけを通じて、有益で建設的なことを成し遂げ、スカウティング外の何百万という若者に有意義な活動を提供し（および彼らをわれわれの活動へ引き付ける）、地域社会に住む人々に、自身の努力により達成する生活水準の改善と連動する新しい意味の自尊心を持たせるのに役立っている。

5 発展の主な歩み（1968 - 1988）

この章の限られた紙面と、資料としての利用価値を考えると、これは別冊の資料として作成することになった（添付資料： “1968年から1988年までの環境保全および環境活動の分野へのスカウティングの参画” 参照）。

期間をこのように定めた理由には2つあげられる。まず、1967年8月、シアトルで開催された世界スカウト委員会および世界スカウト会議で採択された決議の重要性に注目させるた

めである。その決議とは、部外の研究調査員、ラズロ・ナジ氏の“世界スカウティングに関する報告書”の受理と、それを本運動再編成の基本とすること、オタワからジュネーブへの世界本部の移転、および世界スカウト事務局のスタッフ強化であった。第2の理由はジュネーブに事務局が設置された以後、所蔵資料の内容も量も以前とは格段に異なることである。

上記に加え、もうひとつ理由を付け加える必要がある。70年代初頭に開催された2つのイベントが、国際社会の環境問題への参画へ重要なインパクトを与えた。デニス・L・ミドー氏の指導のもと、M・I・T・研究所からの調査グループにより作成された“ローマクラブ”へ提出された報告書“成長の限界”の出版、および1972年6月にストックホルムで開催された“人間環境に関する国連会議”である。上記の2つのイベント、特に後者は環境への関心が、国際的な会合での中心課題となり、スカウト運動全体に直接影響を与えてきた。

6 最近の発展(1989 - 1991)

1989年以来、世界スカウト機構は、主に研究開発委員会を通じて、初めはヤコブ・リチャード基金、続いてジョアン・ヤコブ基金からの財政支援を得て、スカウティングの環境への意義強化の方策を探り、その結果、関連性のある2問題に対応してきた。つまり、それは

- スカウティングは環境に対して何をなすうるか。
- 環境はスカウティングに対して何をなすうるか。

である。

この章では、上記年代の主な発展について述べることにする。

6.1 国連環境計画(UNEP)との協力

70年代初頭、ナイロビに本部が設立されて以来、国連環境計画(UNEP)との協力関係は継続されており、近年、更に強化されている。国連環境計画はメルボルンでの第31回世界スカウト会議に積極的な参加をし、同会議採択決議第6(添付資料 参照)では、両者のさら

なる協力体制が求められた。

1989年、国連環境計画は、環境問題に関係はするが、通常はスカウト・プログラムに反映されていなかった9つの環境分野に関して、資料作成のための資金を提供した。この分野とは、森林、砂漠、大気（オゾン層破壊および温室化現象を含む）、科学薬品、海洋環境、遺伝物質、環境、健康、および野生生物保護の9つを指す。

国連環境計画の教育担当と世界スカウト事務局スタッフ数人が参加して、1989年10月にナイロビでワークショップが開催され、そこでの作業の結果が後日“Scouting : Action for the Environment (スカウティング：環境への行動)”の出版になった(6.3参照)。

この出版物の新刊見本は、1990年6月5日にメキシコ市で行われた「国連世界環境の日」の祝典で発表展示された。その年の「環境の日」のテーマは、“われわれの子どもたち、彼らの地球”であった。

国連環境計画は、地球開発村(6.5参照)においても積極的な参加を果たした。国連環境計画アジア太平洋地域スタッフおよびボランティアは、自然観察、自然探索路、廃棄物処理などに関するワークショップおよび諸活動の運営にあたった。

6.2 世界自然保護基金国際本部(WWF International)との協力

1973年ナイロビの第24回世界スカウト会議期間中の共同宣言の調印以来、両者の協力関係は密接な有益なものとなり、その影響は世界に広がっていった(添付資料 : 1968 - 1988年間の環境保全、環境活動へのスカウティング参加のハイライト参照)。1985年のミュンヘンでの第30回世界スカウト会議では自然保護基金国際本部との協力体制が見なおされ、これに関し慎重審議の結果、各国スカウト連盟へ“...各国でWWFとのより密接な協力関係を構築すること”を勧告することになった。1990年世界レベルでその動きを一層強化していくために新しい措置がとられた。世界自然保護基金国際本部は、“世界自然保全戦略の精神を若者たちのために魅力的で教育的な活動を志向したプログラムに変換をすること”を目標とした「Help to Save the World」(6.3参照)の出版を支援した。

6.3 「世界を救おう」(“Help to Save the World”)とスカウティング：「環境実践活動」(“Action for the Environment”)の出版

「世界を救おう」は、自然保全に関するプログラム資料を掲載しており、世界自然保全戦略の実践への直接的貢献を目指している。1．大切な土壌、2．きれいな見ず、3．澄んだ空気、4．野生生物を守ろう、5．資源の再生、6．環境保全の推進、6つの主な章が収められている。これは、当時ベストセラーとなり、15ヶ国後に翻訳された。世界スカウト事務局が、1973年に発行した自然保全小冊子5編の最新版ともいえる（添付資料 参照）。

「環境実践活動」は、国連環境計画との共同で作成され、世界各国のスカウト連盟が環境教育と活動をスカウト・プログラムへ統合する支援とするために作成された。これは、今日地球が直面している主なる環境問題に関する問題提起という副題のもと、様々な情報が収められている。一連の活動アイデアは、スカウトがこれらの問題解決に有益な参画を行うための手段が提案されている。この資料は、活動とその影響に重点を置き、“地球とわれわれ、大気、化学薬品、砂漠化、森林、きれいな水、遺伝的多様性、大洋、野生生物、環境とわれわれの健康”という10の部分から構成されている。

第1章の「地球とわれわれ」は導入部で、われわれの住む惑星との関わり合い、およびその相互作用について述べている。続く8つの章では、われわれの生態系の様々な面に関係する問題を記述し、各々の問題に対するスカウトにできる対応策を記している。最後の章“環境とわれわれの健康”では、上記全項目を踏まえて、今日の環境状況がわれわれ人類の健康に与える影響について考察している。

どの章の題材も使用するにあたり留意すべき点がひとつある。それは、環境および人類の直面している様々な環境問題は、ひとつのもの、全体の中の一部として考えることである。10章各々で触れられている項目は相互に関連し、問題は重複するものである。

これら出版物は当初、各国スカウト連盟およびその指導者とスカウトたちのために作られたものであるが、学校、他のボランティア組織、特に青少年団体および青少年クラブなどの使用にも十分適合するものである。

6.4 世界スカウト環境年

世界プログラム委員会の提案に基づき、世界スカウト委員会は1990年4月1日から1991年8月31日までを“世界スカウト環境年”（World Scout Environment Year - W S E

Y)と制定することを宣言した。各国スカウト連盟へのサーキュラーにも指摘されているように、この年は環境およびその全範囲、特に環境教育を青少年プログラムにおける主要事項とする機会とするものである。同時にこの年はスカウトたちがこの分野でのわれわれの積極的な関与および参画を各国の公共報道に示す機会でもあった。

われわれの関与の世界的性格に基づき、1990年の世界スカウト環境年では、3つの大きな行事が続けて開催された。

- **世界健康の日** “われわれの惑星 われわれの健康、全世界的に考え、地球的に行動する”をモットーに、環境破壊がわれわれの健康や生活の質に与える悪影響に焦点を置いて行われた。
- **地球の日** 1990年4月22日には、再生エネルギー資源とリサイクル・プログラムの推進、オゾン層や、絶滅に瀕する種および生息地の保護に重点を置いて開催された。
- **地球環境の日** 6月5日に祝典が行われた(6.1参照)。スカウト連盟にこの年の進捗状況について報知するために、世界スカウト事務局は1990年7月パリでの世界スカウト会議のために特に用意された情報を含め、特別ニュース新聞を何号か発行した。この事業は世界スカウト会議日程の中で特に注目を集め、これに関するいくつかの実践報告、“スカウティングと世界の問題”に関する討論会、および世界スカウト事務局新出版物2種の発行(6.3参照)などが取り上げられた。更に、できるだけ多く出版物は、再生紙を利用する努力が払われた。

世界プログラム委員会は、1991年9月、ジュネーブで開催された世界スカウト環境年の会合において、総合評価を行い、各スカウト連盟からの反応は非常に熱心なものであったことが判明した。

6.5 地球開発村

地球開発村(Global Development Village)は、1991年8月に韓国で開催された第17回世界スカウトジャンボリーで初めて導入された。これは、この種の行事において導入された、最も意義深い新企画で、その主目的は地域社会開発とジャンボリーの教育的意義の強化にあっ

た。

地球開発村は、体験学習の原理を通じて、地域社会との関わりの促進を意図した**実践活動による情報スペース**であった。発展途上国、および工業国から、地域社会開発、開発教育ないし開発協力の分野で諸活動を実施してきた約20の連盟が参加の案内を受けた。

地球開発村はいくつもの“地区”に区分されていた。主要なのは、健康、開発と教育、環境の3地区であった。健康地区では、重点が予防接種、栄養と衛生、診療所、麻薬とエイズ教育に置かれており、開発と教育地区では、住居、衛生、学校や運動場等のような地域社会施設等のようなテーマが含まれていた。また、農業、木工、教育、宗教に関連する活動にも重点が置かれていた。環境地区では、リサイクル、野生生物保護、森林再生などの問題を重点に置いていた。

地球開発村は、スカウティングの開発面での主たるパートナーである国連の諸機関（国連環境計画、ユニセフ、世界健康機構、国際計画親子連合（IPPF）、赤十字などの協力により、世界スカウト事務局により組織された。ボーイスカウト韓国連盟は、率先して先鞭となる背後の諸手配にあたった。

地球開発村が、世界ジャンボリーのプログラムの一部に統合され、その結果1万名以上の参加者がその恩恵を受けたことを強調したい。その評価を基に、現在2つの方向で追跡調査が行われている。つまり、参加者のジャンボリーの地球開発村での学習体験を地元の状況の中で強化継続するようにすること、もうひとつは各国スカウト連盟が全国または地方レベルの行事において同様の経験を導入する方法を示すための“ハウツウ”キットを準備することである。

6.6 調査開発委員会

1989年の調査開発委員会の再編成以来、同委員会は、クラウス・ヤコブス委員長の下、主要課題のひとつとして今日の世界における環境問題と、スカウティングがこの分野でどのような貢献が果たし得るかに重点を置いてきた。

この分野における第一歩は、外部機関による調査プロジェクト実施のために1990年3月にバーバラ・アーリンガウス博士という専門家の任命に始まった。調査の第1段階は、既存の文献の見なおしをすること、環境および開発に関するそれらの団体の方針と展開を明確にする

こと、共通の問題となる領域を定義することに置かれた。第2段階は、更なる調査のために多くの国々を訪問し、各国スカウト連盟が現在実施していることと、新たに取り組むことができることにはどんなことがあるかを明確にすることに置かれた。

この調査の結論は、“環境教育と実践：スカウティングの役割の再活性化に向けての提案”という報告書案にまとめられ、1990年6月ジュネーブで開催された調査開発委員会に提出された。この報告書に基づき、同委員会は、同調査員に委託事項の領域を拡大した上で、5つの地域事務局と各地域の特定国いくつかを訪問し、1991年1月に開催されるセミナーの基本的な骨組とするように同調査員が報告書をもう一回作成することを決定した。

この報告書は、“**自然および環境に関する教育と実践を通してのスカウティングの役割の強化**”と題され、1991年1月ドイツのスワロスマルプスで開催されたセミナーで発表された。この会合には、世界委員会および世界事務局員、5地域の地域事務局長、世界プログラム訓練委員会を代表する委員等の世界スカウト機構を代表する者、およびいくつかの国の連盟の主要担当役員とスカウト部外の環境専門家等々、総勢30名が参加した。

この会合の結論として、“スカウティングの基本である、生態系と、環境の意識の強化を目指す一大運動”の重要性が再認識された。また、再認識されたことは、“スカウティングの教育方法の中で自然が果たす基本的役割”、しかも本運動がその意義を十分に活用していないことであった。もし、十分に活用されていれば、この意義　つまり環境と強調している人類　により、本運動はもっと強力なものになるし、現実面でも理論面でも、もっと現代社会に関わりをあらゆるレベルで深められるであろう。この点に関しては、この時の声明では“単に環境プロジェクトに集中するのではなく、環境を重視する精神を本運動の全部面に統合すること”の必要性があげられている。

マルバフ・セミナーの報告書を基に、世界プログラム訓練委員会は、1991年9月ジュネーブでの委員会会合で、この問題の討議を行い、世界委員会に対して、その後3年間の実行計画として、財源が許されるならスカウト運動は環境教育と実践のプログラムに総力をあげて取り組むことを提案した。云うまでもなく、“スカウティングの戦略”の枠の中でも、このことが強調されているのである。

6.7 世界スカウト環境ネットワーク (WSEN)

標記の実行計画のひとつが、世界スカウト環境ネットワークの創設である。このネットワークは、青少年の参加のモデルとなることを目指し、a) スカウティングは環境のために何ができるか、およびb) 環境はスカウティングのために何ができるかを決断することを意図している。

設立にあたっては、現在は発足後間もないが世界スカウト会議からの勧告、特に1990年12月から1991年1月にオーストラリアで第8回世界ムートに関連して開催されたフォーラムの決議が考慮された。1991年9月のジュネーブでの世界スカウト委員会は、世界プログラム委員会の助言に従い、若者の発言が世界レベルで生かされる新しい方法や若者の考え方、主体性が本運動全体の充実のために積極的に取り入れられるようにする仕方を検討した。このネットワークの設立は、その解決策の一部である。

このネットワークの創設は、環境問題が緊急の全世界的ニーズであるだけでなく、若者が特に敏感な問題であるという事実に基づくものである。環境保護は、若者にとって重要なチャレンジなのである。それは全世界に普遍的で、しかも精神的な意義を持ち、個人生活と社会生活の質を将来決める要素である。したがって、環境を守るための行動は、スカウティングの教育目標の最優先達成手段として用いられるし、そうすべきである。そして、そうすることによって、スカウト運動はもっと多くの青少年のための、若者にとってより一層魅力的なものとなり得るし、なるべきものである。

このネットワークの設立は、書く国際コミッショナーおよびプログラム・コミッショナーに対し、1991年回報第27号で通報された。このネットワークの役割は、若者に彼らのニーズを表現させ、行動実現の課程を計画させ、小規模なプロジェクトから始めさせるための資金提供をすることによって、環境行動への自主的な取り組みを励ますことになる。同時にこれにより、スカウト運動の全てのレベルでアイデアと資源の共有が促進され、地方的に、国内的に、国際的なレベルでスカウティングが大衆の目に触れることになる。

もうひとつ、このネットワークの実験的な特徴は、その中核がジュネーブの世界スカウト事務局においてではなく、ある若いスカウト運動のボランティアの家庭に置かれることである。もちろん、彼は世界スカウト事務局の全面的支援を受けてはいるが。

世界スカウト環境ネットワークの第1年目は、“ヨハン・ヤコブ基金”の資金援助を受けるが、その後の出資者の確保については折衝が進められている状況にある。

7 将来の展望

7.1 スカウティングの内的ダイナミズム

1990年7月パリで開催された世界スカウト会議では、「スカウティングの戦略」に関連してたいへん重要な決議がいくつも採択された（決議9/90参照）。このようにして、本運動の成長に関わる決議2/90、登録費に関する決議3/90（これは世界レベルでの登録料や加盟員増加に比例して直接的に影響することを心配せずに各国連盟が、加盟員数の増加を公表できるようにしたものである。）、世界プログラム方針に関する決議4/90、スカウティングにおける成人会員に関する決議5/90などが採択された。これらの決議をひっくるめて考えると、**複合的な効果**が期待され得る**内的ダイナミズム**を生み出していくに違いない。根拠としては、2つの理由があげられる。

- 青少年プログラム、スカウティングにおける成人会員、連盟の運営という“スカウティングの3本柱”と呼ばれてきた3局面に関わることから、相互に強化し合い補い合う。
- 本連盟の様々なレベル、つまり国、地域、世界レベル間の相互作用を必ずや生起し、各レベル相互に恩恵を受ける結果、理論と実践両面の充実が派生することになる。

この筋立ては上記に略述されている（6.7参照）。つまり

- スカウティングは環境のために何ができるか
- 環境はスカウティングのために何ができるか

この2問題は関連する2決議（添付資料決議13/90、14/90参照）にも支えられて、付加的ないし外的要素というよりは、むしろ「スカウティングの戦略」の総合的ダイナミズムの付加的な要素であるとみなせるのである。

同じことは、インドネシアで開催される世界地域社会開発キャンプ（世界COMDECA）と同時に“スカウティングと開発に関する夏季大学”の開催国であるインドネシア連盟の招待を受諾している決議17/90にもいえる。環境と開発の密接な関係を考慮に入れると（4.2参照）、本運動がこの主題について徹底的な精査が行われ、かつ地域社会におけるスカウティングの役割をより一層明確にし豊かにすることができる公開討論会の場を提供してくれるのは、明らかである。

7.2 国際社会のダイナミズム

国際社会の動きは、決して留まることはない。同様に、スカウティングの生命も同じである。

環境と開発に関する世界信託会議の報告書は、“**変革のための世界行程**”を作り出した。ここでいう変革とは、貧困、経済成長、環境汚染、工業化について、われわれが考えるような変革のことである。持続的な開発の概念が、先進国及び発展途上国双方の国内的、国際的なプログラムにもなるし、また国内および国際的プログラムに、また社会の各分野にとっても、新しい機会を提供するものである。

この概念は、1992年ブラジル・リオデジャネイロで開催される環境と開発に関する国連会議（UNCED）の中心議題となるであろう。スカウティングは、この会議の準備に多岐に参画してきたが、最も意義深いのは、1992年3月22日から29日にかけてコスタリカのサンホセで開催される世界青少年フォーラムへの積極的参加であろう。

環境に関する反省と活動の世界的プロセスへの最も重要な貢献は、“**地球に優しくする：持続的な生活への戦略**”という研究の出版で、これは世界環境保全連合（IUCN）、国連環境計画（UNEP）、世界自然保護基金（WWF）との協同で準備が進められ、1991年10月に出版された。この研究は、世界社会に向けられたもので、エネルギーの活用、商業社会の役割、人類の定住、農業、森林地帯、新鮮な水と大洋、沿岸地帯等、広範な項目に関して実際的な勧告が行われている。

全プロセスに占める**環境教育の主要な役割**は、その資料のいろいろな項目に度々強調されており、特に“個々人の心構えと実行を変える”および“地域社会が周囲の環境に考慮を払えるようにする”という目的に関連した分野ではそうである。云うまでもなく、これはスカウティングが大きな役割を果たすことのできる、正にうってつけの課題である。

8 結 語

スカウティングは、環境の分野における教育と活動に長期にわたり、輝かしい実績を残しているけれども、世界スカウト運動は、上記の方向に沿って、この分野での努力を増大していくことを決定した（6および7章参照）。

7歳以上の全年齢者に対しても、都市、農山村の青少年に対しても、いかなる地理や天候下でも、環境教育におけるスカウティングの広範な経験は、どんなに強調してもし過ぎることのない偉大な資産である。一方、今日の環境教育に対して、青少年から顕著な反応があることは、環境問題への使命感が目標である青少年にまで届いているという証に他ならない。

このようにして、環境教育およびスカウティングの実践を強化したいという**全世界的動向**から、本運動としては初めて、**市民となり意思決定に関わる世代を訓練して**、過去における環境破壊となる決定を回避することを決断できるようにする、いいかえれば、“自然界のシステムと環境の質を重視した世界経済および社会的発展を連動させる**持続的な開発**の達成する”決意をもった者の育成を目指すことである。

付表1 . 世界スカウト会議における環境と自然保護に関する決議（抜粋）

1971年

第23回世界スカウト会議（世界スカウト会議決議第12/71号 社会環境）において、自然保護に対するわれわれの継続的な関心は、スカウティングの戸外活動およびウッドクラフトの訓練の延長上にあることを、全てのスカウト連盟は心に置き、その緊急性と重要性に鑑み環境全体の保全のための活動を継続することを求める。また、人類の自然環境維持のために働く、他の団体と共に、一層努力を傾注し、努力し合うよう各国のスカウト連盟を奨励する。

1973年

第24回世界スカウト会議（世界スカウト会議決議第5/73号 スカウトフォーラム）において、本会議は、スカウトフォーラムに共通の次の決議を是認し、世界事務局および加盟組織に対してこの決議に対処することを推奨する。

(a)

若人の興味と必要に合うように、また企画と決定とにスカウト太刀が積極的に参加する機会を与えるために、基本的なプログラムのシステムを定期的に更新する。

(b)

15歳あるいはそれ以前の年齢に男女合同の活動を導入する。

(c)

地域社会におけるエコロジー・プロジェクトを含め、スカウティングのプログラムにおける自然保護を、一層強化する。

(d)

全国スカウト・フォーラムを年長年齢のプログラムの一部に組み入れる。

世界スカウト会議決議第8/73号自然保護において、本会議は世界自然保護委員会の設置を歓迎し、

- 自然保護の問題に緊密な協力を図るため世界スカウティング・世界野生生物基金と共同の「意思の宣言」に満足の意を表す。
- 世界スカウティング・世界野生生物基金「自然保護プロジェクト四大目標」を是認し、各国組織は国家レベルで同類の協力と共同活動について話し合うよう要請する。

1977年

第26回世界スカウト会議（世界スカウト会議決議第8/77号 自然保護記章）において、世界自然保護記章が32ヶ国で使用されていることを確認し、併せて、世界自然保護記章を使用していない国の連盟は、独自の要綱を開発し、その根本的なプログラムの一部として世界自然保護記章を採用することを奨励する。

1985年

第30回世界スカウト会議（世界スカウト会議決議第6/85号 世界野生生物基金）において、本会議は、各国スカウト組織に対し、各国における世界野生生物基金との協力について、より深い行動を展開するように奨励する。併せて（世界スカウト会議決議第7/85 再植林運動）において、各国スカウト連盟に対し、干ばつによって被害を受けている国々において、再植林および国土保存の活動およびプロジェクトを展開するよう奨励し、多くの被害国におけるこれからの努力を支援するため、国際協力の首唱を奨励する。

1987年

第31回世界スカウト会議（世界スカウト会議決議第6/87号 環境教育）において、環境およびスカウティングにおける環境教育の根本的な重要性を認識し、世界自然保護戦略と国連環境・開発世界委員会の最近の報告に強調されているように、環境保護と開発との密接な関連を認識する。

- スカウティングと密接に共同するという国連環境プログラム（UNEP）の働きかけを歓迎する。
- 世界委員会に対し、UNEPとより密接な関連を確立することを勧奨する。
- 各国スカウト組織に対し、環境と環境教育に向けての各国の活動を、一層強化することを強く推薦する。

1990年

第32回世界スカウト会議（世界スカウト会議決議第13/90号 環境教育）において、

- 世界機構の規約の中に、自然界の保全の尊重はスカウト運動基本原理の一部であり、自然の中で活動するプログラム教育方法の一部であることを認める。
- 自然および環境の保護は、現代の最も重大なチャレンジのひとつとなることを認識する。
- スカウト運動は歴史的に環境教育と活動にパイオニア的な役割を果たしてきたことを認識する。
- スカウティングの役割とこの不可欠要素の可能性を再活性化する必要性を意識する。
- 各国スカウト連盟に対し、青少年プログラム、成人指導者訓練、連盟の運営全体の中に生態系上および環境上の意義を強化することを要請する。
- 世界委員会に対し、この目標を達成するために必要な資料に関し、各国スカウト連盟を援助することを懇請する。

世界スカウト会議決議第 1 4 / 9 0 号世界スカウト環境年の実施について、

- 世界スカウト環境年を宣言するという世界委員会の決定を賞賛し、各国スカウト連盟に対して、環境教育と行動に関連する活動を年間を通じスカウトの参加を励ます新しい創造的な方法を見出すことを要請する。
- 「世界援助とスカウティング：環境への行動」の発行を歓迎し、世界自然保護基金（WWF インターナショナル）と国連環境プログラム（UNEP）に対し、スカウト連盟に重要な資料を提供し得ることができた寛大な技術的・財政的な支援に感謝をする。
- これら機関とスカウト運動との間の密接な協力を世界・地域・国家レベルで推進するよう奨励する。

付表 . 自然保全 / 環境活動へのスカウティングの参加

1 9 6 8 ~ 1 9 8 8 年のハイライト

1967年

第21回世界スカウト会議（アメリカ合衆国シアトル開催）。世界スカウト委員会は世界スカウト事務局をオタワからジュネーブに移転を決定し（世界スカウト会議決議第12/67号）、ラズロ・ナジ博士を世界事務総長に任命、世界スカウト事務局スタッフの強化の決定。

1968年

（5月1日）世界スカウト事務局本部ジュネーブ設立。

1969年

世界スカウト事務局は「奉仕のために、備えよつねに。プログラム担当のコミッショナーと指導者向けのハンドブック」を発行。この小冊子はスカウトの奉仕計画と効果的な奉仕訓練方法の実例として、野生生物保護、土壌腐植、灌漑水プロジェクト、植林をあげて解説している（1970年にフランス語版発行）。

1970年

- （3月）世界スカウト事務局は“自然保全の法則”を題材に“世界スカウティングのアイデア交換”を発行し、この冊子の中で、このような規則は、“自然環境の保全に役立つ個人的な行動様態を教育するのに、しばしば使われる手段”であることが明示されている。ここでは、英王国、ベルギー、イタリア、ドイツ、オランダで用いられた規則から実例を引用している。
- 世界スカウト事務局は1970年2月9日～12日にストラスブルグでヨーロッパ議会の組織した“明日のヨーロッパにおける環境の管理に関するヨーロッパ自然保全会議”に積極的に参加する。世界スカウト事務局の提出した報告書は“スカウティングと自然保全”を主題として（1971年に）ヨーロッパ会議の回報に発表された。
- 多くのヨーロッパ・スカウト連盟は、ヨーロッパ会議の宣言した“ヨーロッパ自然保全年”に参画している。世界スカウト事務局は“フランス・スカウト連盟”の“ノアの箱舟”と題された自然保全に関する20項目の実例集からヒントを得て「世界スカウティングのアイデア交換」を発行している。ここでは、情報活動から森林の下刈りまで、また渡り鳥から植樹までを扱っている。

1971年

- 世界スカウト事務局は“開発と自然保全での青少年の役割に関する用語集”を発行する。この24頁の資料には、100以上の参考になる情報があがっている。その中から東京で開かれた第23回世界スカウト会議“開発のためのスカウティング”という主題の下地をなすものであった。
- 世界スカウト事務局は“スカウティングと自然保護”と題する参考資料を発行する。これは世界会議資料のひとつとなった。これは2部からなり、1部は“スカウティングにおける自然保護の理論的根拠”、もうひとつは“自然保全分野でのスカウトの行動”の全体像を示すものである。

1972年

- (6月)世界スカウト事務局は“スカウティングと環境”に関する説明資料を発行する。これには、異年齢グループに適した多くの活動が記録されている。年長グループ向きには“カナダとニュージーランドにおける、大自然探渉路の建設、フィリピンの3百万本植樹、アメリカ合衆国での全国ゴミ撲滅運動、スウェーデンでの環境実験場としての島、世界中での河川清掃や井戸掘り”等があげられている。
- (7月)世界スカウト事務局は“スカウティング、よりよい世界を作ることができる”という小冊子を発行する。この広報資料には“スカウティングは人類の環境を改善し保護することができる”の一項がある。いろいろな活動例、たとえば植樹、自然保全教育、中東での砂漠改良プロジェクト、アメリカ合衆国、ニュージーランド、ヨーロッパの大々的な清掃、自然保全運動などがある。
- 世界スカウト自然保全委員会が設立された。世界プログラム委員会に対して、スカウト・プログラムにおける自然保全に関する問題について報告をした。

1973年

- 第24回世界スカウト会議が、1973年7月にケニアのナイロビで開かれ、“意図宣言”と呼ばれる共同方針声明書がWWF会長ピーター・スコット卿と世界スカウト

委員会アントニオ・デルガド議長との間で調印された。両組織は“自然と自然環境の保全に密接に、長期的に協力し、提携する”ことに合意した。

その結果、WWFと世界スカウティングの最初の会同事業として“4重点プログラム”が開始され、その内容は次の通りであった。

(1)

環境教育に関する5小冊子を発行する。それは、きれいな水、ごみをなくす、大切な土、きれいな空気、自由な野生生物であった。やがて、これはスカウトの「ベストセラー」となり、15ヶ国後に翻訳された。

(2)

世界自然保全章の創設、WWFのシンボルであるパンダマークが世界スカウト章の上に描かれた記章で、あわせて“世界自然保全章の取得資格要件案”という小冊子が、8 - 11歳年齢(茶段階)、12 - 15歳年齢(緑段階)、15歳以上(青段階)として提示された。

(3)

世界スカウト事務局とWWF合同実施の「虎を救おう」絵画コンテストには世界中から何千もの応募があった。20点の優秀作品が選考され、これらは郵便切手に制作され運動のために販売された。

(4)

自然保全のモデルとして、スカウト訓練センターを開発する。

- “スカウティング・プログラムにおける環境教育理論に関する国際セミナー実験”

8月19～24日スウェーデン・クシュサター指導者訓練研究所で開催。

世界スカウト事務局とスウェーデン・ガイド・スカウト連盟の共催。15ヶ国の代表が参加。

1974年

世界スカウト事務局は「自然保全センター」という小冊子を発行。その目的は、各国連盟が

全ての常設スカウト野営場と活動センターを自然保全原理に基づき管理運営をするよう励ますこと、つまり、キャンプは重要な教育的な役割を果たすように按配する。

1975年

- 第14回世界ジャンボリーが、ノルウェーのリリハマーで、1975年7月30日～8月7日まで開催、10種類の自然保全活動があり、それは風力/太陽エネルギーから、人類汚染、土の腐植、自然探渉路、水の浄化までであった。
- 世界ジャンボリーの準備のひとつに、世界スカウト事務局は、「ジョイン・イン・ジャンボリー」を発行し、ジャンボリーに参加できない者のためにジャンボリーの精神を広めることにした。この中には、環境保護の原理にしたがって、「ジョイン・イン・キャンプと活動」を各国連盟が実施する援助をした。
- 「国際ショー・アン・ドゥ自然保全プロジェクト・キット」が「メッセージを増幅する」という題名で広報ガイドとして発行された。この本には64種のプロジェクトチャートが含まれている。簡略で図入りの編集方法は各国の好評を得、フランス語、スペイン語版も発行された。
- 世界スカウト事務局は「ワールドスカウティング」誌に「自然保全」の16頁分の付録を発行した。

1976年

- (2月)第1回アフリカ・スカウト自然保全セミナーが、ケニアのナイロビで開催された。アフリカの英語圏7ヶ国の代表30名が参加し、10日間、講義、討論、外部施設の見学、プロジェクトの作成を行った。
- 世界スカウト事務局は、WWFと共に「メッセージを増幅する」という題の視聴覚教材を制作した。40枚のスライドは各国連盟に無料配布され、自然保全のメッセージを広める役を果たした。
- 世界スカウト事務局は「ワールドスカウティング」誌の付録として「猛禽類」という16頁の資料を発行した。

1977年

- (1月)世界スカウト事務局は「キャンピングと自然保全」という小冊子を発行。この目的は、キャンプ活動の生態系への影響をできるだけ積極的に取り入れるため、新しいキャンプ規則を発行することにあった。この小冊子はリサイクル紙で印刷された。
- (4月)第1回全アフリカ・スカウト・ジャンボリーはナイジェリアで開催され、4500名の参加者はナイジェリア文部省の専門指導者の指導の下で様々な自然保全プロジェクトを体験した。自然保全章が交付された。
- (10月)世界スカウト事務局は“キャンピング自然保全”に関する「アイデア集」を発行した。この目標は、この冊子に盛り込まれたメッセージを広めることであった。
- 1977年7月に世界プログラム委員会に提出された資料によると加盟国の7割、33ヶ国が世界自然保全章を採用し5ヶ国が採用の準備中である。

1978年

- “自然保護のための第2回アフリカ・スカウト・セミナー”は2月13日～23日コートジボアールのアビジャルで開催され、フランス語圏、アメリカ諸国10カ国から30名の代表が参加した。最後に、環境教育と実践の分野で各国が行う目標を設定した。
報道機関にも広く取り上げられた。このセミナーは日本万国博照会170協会の資金援助を受けた。
- 第8回アラブ・スカウト会議は、7月21日～24日にモロッコで開かれた。テーマは“自然保全におけるスカウティングの役割”であった。

1979年

- “第1回ラテンアメリカ自然保全スカウトセミナー”が2月12日～21日、コロンビアのカリの“熱帯農業国際センター”で開かれた。参加国12、参加者34名。報道で広く取り扱われ、大学教授、研究者、指導的な立場にある産業人が講演をした。

ラテンアメリカ地域加盟国の環境教育に関し、分岐点となった。WWFが資金援助をした。

- アフリカ南部地域の国々を対象に「自然保全セミナー」が1979年8月6日～11日、レソト国マセルで開催されボツワナ、レット、南アフリカ、スワジランドから22名が参加。

1980年

- アラブ語の「自然保全活動例集」が発行され、セミナーに使われた。
- 世界スカウト事務局は、スウェーデン・ベダステナでの1980年8月22日～26日のIUCN教育委員会の会合に出席、その目標は、環境教育であった。
- 世界スカウト事務局は、S.A.バタ靴会社後援で「エネルギー保全101実例活動集」を発行した。

1981年

アラブ地域自然保全セミナーが、1981年3月22日～28日、モロッコのラバトで開催され、11ヶ国38名が参加した。前回のセミナーと同じく、参加者は、熱心に参加、スカウト・プログラムの環境の重要性を一層推進するための計画作りが行われた。

1982年

- 世界スカウト事務局は、“環境と将来に関するシンポジウム（民間団体による）”に出席。1982年5月3日～12日、ケニアのナイロビで環境連絡センター（ELC）の開催であった。
- UNEPおよびELCとは、アフリカ地域事務局を通じて通常業務の一部として行われるようになった。
- スペイン語による「自然保全活動集」が発行された。

1986年

1986年4月、ポルトガルでのヨーロッパ地域会議の決議に基づき、環境に関するヨーロ

ッパ作業部会が3年任期で設立された。8名の委員は、スカウト側4名、ガールスカウト側4名で、エコロジー研究会と2回のヨーロッパセミナーを開いた。

1987年

“エコキャンプ‘87”の名称で、ヨーロッパ地域のスカウト・ガールスカウト世界組織加盟国により、エコロジー研究会が開かれた。ベルギーのデクレイスで、1987年7月20日～31日19カ国235名の若者が参加した。

1988年

- 「環境教育に関するヨーロッパ・セミナー（スカウティングとガイドング共催）」がフランスのメランで8月22日～28日、12ヶ国33名が参加して開催された。
- スカウティングは、UNEPから、本運動の顕著な環境活動の功績に対して「地球500：環境面の功績への感謝状」を授与された。1971年以降、地域社会開発事業は100以上が行われ、各地でセミナーが行われた。

（以上）